



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2002, 9: 54-54

ISSUE DATE:

2002-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57836>

RIGHT:

学生の声**「博士課程に進学して」**

エネルギー科学研究科 エネルギー基礎科学専攻 近藤研究室 博士後期課程3年 鈴木 康 浩

京都大学大学院に進学してもう5年目になる。振り返ってみるとあっという間の4年間であった。大学院に進学する理由は人それぞれであると思う。修士課程の場合は、正直、就職のために進学する人間が大半であると思う。特に、エネルギー科学研究科のような独立専攻の大学院であれば尚更である。私は、就職のために大学院に進学する人の気持ちはわからない。たかが、数万円差の初任給のために2年も時間を費やすのだから大したものだと思う。ところが博士課程への進学は修士課程への進学とは、また違った意味を持つ。博士課程への進学は、自分の研究課題に対して専門性を深めると共に、自分の可能性を狭めてしまう結果を生むかもしれないからだ。現実問題として、一般企業への就職といった観点からはマイナスになりかねない。

しかし、自分が興味を持つ研究課題に対して、静かに、そして深く探求したければ博士課程への進学は避けられないと思う。私の場合、所属する研究者のコミュニティが比較的小規模な為か、学生という立場ではなく1人の研究者として研究課題に評価が下される。一線の研究者の指摘や批判、またそれらを通しての議論は他では味わえないものである。

気が付けば最終学年であるが、残された一年を有意義に過ごしたいと考えている。

「社会人博士課程と産学連携」

電子物性工学専攻 野田研究室 博士後期課程1年 杉 立 厚 志

'02年10月より三菱電機（株）から博士課程の学生として京都大学大学院工学研究科電子物性工学専攻 野田研究室に「フォトニック結晶」を研究テーマとしてお世話になっています。

光デバイスの開発に従事している日頃から、現在の製品とは異なる新しいコンセプトの将来デバイスの必要性を感じていました。実は1年前から「フォトニック結晶」研究を試みたものの、日々の開発業務に追われ文献調査等に留まり、はかばかしい成果は上がりませんでした。そこで、ちょうど担当業務の目処もつき、将来の研究・開発展開としてやはり既存の光デバイスの延長ではない「フォトニック結晶」を検討すべき、との判断から、この分野で世界最先端のアクティビティを誇る野田研究室に相談に伺いました。当社は博士号取得を奨励しており、また野田先生からは「成果を上げるためには集中して来ることが望ましい。」と説明を受け、フォトニック結晶を次の研究・開発のテーマとして積極的に推進するため社会人博士課程の学生としてお世話になることになりました。

現代の技術は、広範な知識と様々な基礎および応用技術を複雑に組み合わせ、使いこなす事が求められ、そのため数年以上の実分野での開発経験は非常に貴重です。産学の連携、と言われていますが、企業研究員は市場のニーズの把握だけでなく幅広い技術分野の経験と各種応用技術の経験を積んでおり、大学にお世話になるだけでなく、大学の基礎研究者とうまく連携することでお互いの刺激となりより良い成果を生み出し得ると考えています。

現在、大学と会社で週を半分程度ずつ行き来していますが、野田研究室には助手、PDの方、他にも複数の企業研究員が来られており、野田先生を始め、それら研究員、学生諸氏のおかげで「2次元フォトニック結晶導波路レーザの室温発振」という成果も短期間で上げることが出来ました。この場を借りてお礼申し上げますと共に、今後更なる研究の進展を目指し、産学連携の良き事例に成れればと考えています。